

和太鼓の風

夏も終わるころ、北海道を訪れた。久々にオロフレ峠の霧に包まれたと思って、千歳から登別を経て洞爺湖へ向かった。

折からの「温泉祭り」とやらで、登別は、いつも以上のにぎわいであったが、小、中、高校生が、和太鼓で、祭りの行事を盛り上げていた。「ズン ズン タン タン」腹に響く太鼓の音は、旅の愁いを慰めたが、そのうち、言いしれぬ感動が胸底を突き上げてきた。

子どもたちはみな、白い足袋はだしでバチを握っている。姿勢を変えるため、足を動かすとき、その裏が真っ黒になっているのが見えた。幼い子から、女子高校生まで、眉（まゆ）根の凜々（りり）しさは変わらない。人を感動させるのは、彼らの太鼓打つ心の一途さであろうか。

和太鼓の美しさは、停止の瞬間にある。次の一撃を振り下ろすため、顔を引き締め、バチを振り上げ、静から動へ移ろうとするその瞬間に和太鼓の美は存在する。

胸熱くなる思いで私は、日本人の血を思った。この感動の底に潜むのは、祖先を同じくし、同じ米を食って、この列島に育った者のみが有する、日本人の「血」なのだ。

「十歳違えば異邦人」などと、世代間の違和が語られる昨今であるが、決してそうではない。それはいつときの事、我々の体には、同じ民族の血が流れているのだ。登別を遠ざかる私に、風はなおも太鼓の音を、断続的に運び続けた。

（平成 16 年 10 月 7 日付け 東京新聞ショッパー掲載）